

適用表と使用上の注意【最新版】

ジベレリン協和液剤

平成28年4月20日改訂

協和発酵バイオ株式会社

【 ジベレリン協和液剤 】

最新の適用表 : 平成 28 年 4 月 20 日改訂

適用表 【 ジベレリン協和液剤 】

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かんきつ(不知火、ぼんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズヰ(無核)温州みかん、きんかんを除く)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		50~100 L/10a	開花始め~ 満開10日後		散布	
	花芽抑制による樹勢の維持		50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
不知火 はるみ	落果防止	ジベレリン 2.5ppm	200~ 700L/10a	収穫後~3月	3回以内	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60~80 倍液に加用)	
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5~1ppm	50~500 L/10a	着色終期 但し、収穫7日前まで		散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~ 満開10日後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~満開10日 後		散布	
ぼんかん	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5ppm	50~500 L/10a	着色始期~4分着色期 但し、収穫21日前ま で	1回	果実散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~満開10日 後		散布	
長門ユズヰ (無核)	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5ppm	50~500 L/10a	着色始期~4分着色期 但し、収穫21日前ま で	1回	果実散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~満開10日 後		散布	
	着果安定	ジベレリン 50ppm	50~100 L/10a	開花期~開花終期		花又は果実散布	
すだち	果皮の 緑色維持	ジベレリン 10~25ppm	50~400 L/10a	収穫予定 14~30日前	1回	果実散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~ 満開10日後		散布	
平兵衛酢 かぼす	果皮の 緑色維持	ジベレリン 5~25ppm	50~400 L/10a	収穫予定7~30日前	1回	果実散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~ 満開10日後		散布	
ワシントンネーブル	果皮の 緑色維持	ジベレリン 10~25ppm	50~400 L/10a	収穫予定14~30日前	1回	果実散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
日向夏	落果防止	ジベレリン 500ppm	30~40 L/10a	満開10~20日後の 幼果期	1回	幼果に散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
日向夏	無種子化 落果防止	ジベレリン 300~500ppm	30~40 L/10a	満開7~10日後	1回	果実散布	
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヶ月後		立木全面散布 又は枝別散布	

【 ジベレリン協和液剤 】

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	50～250 L/10a	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	3回以内
		ジベレリン 10ppm				立木全面散布 又は枝別散布 (プロトロジヤモン 1000～2000倍液 に加用)	
	ジベレリン 2.5ppm	200～700 L/10a	11～1月 但し、収穫後	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液に加用)			
	落果防止	ジベレリン 10ppm	50～250 L/10a	開花始め～ 満開10日後		散布(プロトロジヤモン 1000～2000倍液に 加用)	
		ジベレリン 25～50ppm				散布	
	浮皮軽減	ジベレリン 1～5ppm	100～400 L/10a	収穫予定日の3ヶ月前 但し、収穫45日前まで		果実散布 (プロトロジヤモン 1000～2000倍液に 加用)	
きんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	50～250 L/10a	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止			開花始め～満開10日後		散布	
	着果安定	ジベレリン 300ppm	30～60 L/10a	一番花開花期		花に散布	
かき	落果防止	ジベレリン 50～200ppm	30～100 L/10a	満開10日後	1回	幼果及び へたに散布	
すもも (貴陽)	着果安定	ジベレリン 100～200ppm	20～50 L/10a	満開20～30日後 (第1回目) 満開50～60日後 (第2回目)	2回	果実散布	2回
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25ppm	100～400 L/10a	開花期	1花当り 1回	花に散布	1花そう当り 3回以内
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50～200ppm	—	は種前	1回	種子浸漬	1回
みつば (軟化栽培 を除く)	生育促進	ジベレリン 10ppm	50～100 L/10a	本葉2～3枚時 (第1回目) とその2週間後 (第2回目) 但し、収穫14日前まで	2回	葉面散布	3回以内 (種子への処理 は1回以内、 は種後は 2回以内)
みつば (軟化栽培)		ジベレリン 20～50ppm		根株伏込時		根株上面に散布	2回以内 (種子への処理 は1回以内、根 株伏込時は 1回以内)
ふき		ジベレリン 25ppm	50～300 L/10a	葉数3～4枚時 (草丈10～30cm頃)		1回	全面散布
うど (春うど)	ジベレリン 50ppm	1株当り 20～25mL	伏込時	根株散布			
	ジベレリン 50～100ppm	—		根株浸漬			
たらのき (促成栽培)	萌芽促進	ジベレリン 50ppm	100～200 mL/m ²			駒木散布	

【 ジベレリン協和液剤 】

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
さやいんげん (矮性(促成又は半促成栽培))	節間伸長促進	ジベレリン 5ppm	1株当たり 2mL	本葉 0.5~1.5枚 展開時	2回以内	茎頂部散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は2回以内)
トマト	空どう果防止	ジベレリン 10ppm	1花房当たり 5mL	開花時	1花房当たり 1回	花房散布 (トマト落果防止剤と併用)	種子への処理は1回、 1花房当たり1回
メロン	着果促進	ジベレリン 200ppm	1花当たり 2~5mL	開花前日~翌日	1花当たり 1回	散布 (4-CPA 剤 50倍液に加用)	種子への処理は1回、 1花当たり1回
なす	着果数増加	ジベレリン 10~50ppm	100~150 L/10a	開花時	1回	葉面散布	2回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は1回以内)
しそ (花穂)	穂の伸長促進 花径の伸長促進	ジベレリン 5ppm	50L/10a	出穂期 但し、収穫5日前まで	2回以内	茎葉散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は2回以内)
畑わさび	花茎の抽出 時期促進及び 発生量増加	第1回目 ジベレリン 100ppm 第2回目 ジベレリン 100ppm	1株当たり 2mL	花芽分化後の10月下旬 (第1回目)及び 第1回目処理後 約10日後の11月上旬 (第2回目) 但し、収穫60日前まで	2回	株の中心部に 散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は2回以内)
いちご (促成栽培)	着果数増加 熟期促進	ジベレリン 10ppm	1株当たり 5mL	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	1株当たり 6回以内	茎葉全面散布	1株当たり 10回以内
いちご	果柄の伸長促進			頂花の出蕾直後~ 開花直前	1花房当たり 1回	株の中心部に散布	1株当たり 10回以内
いちご (親株床)	ランナー発生促進	ジベレリン 50ppm	1株当たり 10mL	採苗時 ランナー発生直前 ~発生初期	1株当たり1回	茎葉散布	1株当たり1回
ごぼう (促成栽培)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 10~15ppm	50~100 L/10a	休眠に入る直前 (残葉2枚程度の頃) 及びその約1ヶ月後 但し、収穫30日前まで	2回以内	茎葉散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は2回以内)
種いも用 ばれいしょ	全粒種いもの増収	ジベレリン 5~10ppm	—	植付前		30秒間 種いも浸漬	
シクラメン	開花促進	ジベレリン 1~5ppm	1株当たり	9月中・下旬	1回	花蕾を含む芽の 中心部に散布	1回
プリムラ (マラコイデス)		ジベレリン 10~20ppm	2~5mL	11月上旬頃の 花蕾出現直後		株の中心部に 散布	
みやこわすれ	開花促進	ジベレリン 50~100ppm	1株当たり 10~15mL	1月中旬の 保温開始時から 7~10日間隔	3回	葉面散布	3回以内
きく	草丈伸長促進	ジベレリン 25~100ppm	50~100 L/10a	生育期	2回以内	茎葉散布	2回以内
しらん		ジベレリン 50ppm	—	植付時	1回	30分間株浸漬	1回
チューリップ (促成栽培)	開花促進	ジベレリン 400ppm	1球当たり 1mL	草丈7~20cmの時に 7日間隔	2回以内	筒状の葉の 中心部に滴下	2回以内
	花丈伸長促進 及び 茎の肥大促進	ジベレリン 100ppm		草丈7~10cm時	1回	ホルクコロフェニロン 0.05~ 0.1ppm液に加用 葉筒内に滴下	
てっぽうゆり (促成栽培)	休眠打破	ジベレリン 1000ppm	—	低温処理前		30秒間 球根浸漬	1回

【 ジベレリン協和液剤 】

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
カラー	生育促進	ジベレリン 50ppm	—	植付時	1回	球根浸漬	2回以内
			50~150 L/10a	花茎伸長期		茎葉散布	
アイリス		ジベレリン 50~100ppm	—	植付時		球根浸漬	1回
スパティフィラム	開花促進	ジベレリン 250~500ppm	30~40 L/10a	出荷予定期の 2~3ヶ月前		茎葉散布	
トルコギキョウ	生育促進	ジベレリン 50~100ppm		生育期間中に 吐芽化した時			
りんどう	発芽促進	ジベレリン 50~200ppm	—	は種前		種子浸漬	2回以内 (種子への処理 は1回以内、 は種後は 1回以内)
	生育促進	ジベレリン 100ppm	50~150 L/10a	定植直前または 定植1~5週間後		茎葉散布	
			1株当り 5~10mL	収穫後		切株散布	
ソリダゴ	生育促進	ジベレリン 25ppm	1株当り 1mL	活着直後 又は萌芽期		茎葉散布	1回
花き類 (りんどうを除く)	発芽促進	ジベレリン 50~200ppm	—	は種前		種子浸漬	
アザレア	開花促進	ジベレリン 250~500ppm	30~40 L/10a	開花予定日 約1ヶ月前	茎葉散布		
さつき (施設栽培苗)	茎の伸長促進 花芽分化の 抑制	ジベレリン 100~200ppm	50~100 L/10a	茎の伸長初期~ 伸長終期 (開花盛期以降) 1~2週間間隔	3回	頂芽に十分散布	3回以内
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破に よる生育促進	ジベレリン 25~50ppm	50~200 L/10a	休眠期	1回	切り枝全面散布	1回
			—			切り枝浸漬	

【 ジベレリン協和液剤 】

使用上の注意事項

〔1〕 薬液の調製法及び取扱い上の注意

(1) 本剤は次表に従って所定量の水に希釈すれば希望濃度の水溶液を作ることが出来る。

1ビン 40 mL (ジベレリン 200 mg含有) 当り水量

ジベレリン 濃度	1 ppm	5 ppm	10 ppm	25 ppm	50 ppm	100 ppm	200 ppm	400 ppm	500 ppm	1000 ppm
[薬液+水] の総量	200 L	40 L	20 L	8 L	4 L	2 L	1 L	0.5 L	0.4 L	0.2 L

1ビン 100 mL (ジベレリン 500 mg含有) 当り水量

ジベレリン 濃度	1 ppm	5 ppm	10 ppm	25 ppm	50 ppm	100 ppm	200 ppm	400 ppm	500 ppm	1000 ppm
[薬液+水] の総量	500 L	100 L	50 L	20 L	10 L	5 L	2.5 L	1.25 L	1 L	0.5 L

- (2) 使用に当ってはその都度溶解調製することが望ましい。溶解後放置すると効力が低下する場合がありますので、なるべく調製当日に使い切ることを。
- (3) ボルドー液等アルカリの強い薬剤との混用はさけること。
- (4) 本剤の使用に当っては使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

〔2〕 使用上の注意

(1) ぶどう

ぶどうには場合によってはサビ果の発生等、果実に障害が起こることがあるので、使用しないこと。

(2) かんきつ

<落果防止>

①本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用すること。

②果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守ること。

<花芽抑制による樹勢の維持>

①衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しないこと。

②低温が続いた年(極端な低温の年)または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がけること。

③散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布すること。

(3) 不知火・はるみ

<花芽抑制による樹勢の維持>

①ジベレリンの使用濃度を 2.5ppm で使用するときは、マシン油乳剤 60~80 倍液に加用する。

②マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ、使用すること。

(4) 温州みかん

<花芽抑制による樹勢の維持>

①ジベレリンの使用濃度を 2.5ppm で使用するときは、マシン油乳剤 60~80 倍液に加用する。

②マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ、使

【 ジベレリン協和液剤 】

用すること。

<浮皮軽減>

① 本剤処理により着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整すること。
使用濃度の目安

- ・貯蔵用または樹上完熟の温州みかんでは、概ね 3.3～5ppm
- ・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね 1～3.3ppm

② 本剤処理により葉斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

(5) ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意すること。

- ① 異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がないことがある。
- ② 通常幼果 1 果当り小型噴霧器で 0.1～0.2mL 程度を噴霧する。

(6) 長門ユズキチ（無核）

長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布すること。

(7) 日向夏

日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布すること。

(8) かき

- ① 散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなるおそれがあるので、十分注意すること。
- ② 本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節すること。
- ③ 散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行うこと。
- ④ 品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用すること。

「富有、早秋、太秋、新秋、甘秋」

(9) すもも（貴陽）

- ① 授粉を行ってから、散布すること。
- ② 薬液が付きすぎないように、処理後、枝や棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とすこと。
- ③ 第 1 回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る傾向があるので、所定の使用時期に使用すること。
- ④ 本剤の散布により結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節すること。

(10) みつば（軟化栽培を除く）

- ① 散布する場合、葉の表裏に十分付着させること。
- ② 高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

(11) みつば（軟化栽培）

- ① 灌水は処理の当日はさけ、翌日に行うこと。
- ② 散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減すること。

(12) ふき

収穫間近に散布すると効果が減少することがあるので、使用時期を誤らないこと。

(13) 畑わさび

- ① 花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理すること。
- ② 全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず 2 回処理すること。気温が 5℃ 以下では効果が劣るので 11 月上旬からビニール等で被覆し、保温管理すること。また、15℃ 以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃ 以上にならないよう温度管理には十分注意すること。

(14) たらのき

- ① 散布は散布むらがないよう噴口の小さい散布器を用いて入念に行うこと。
- ② 薬液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておくこと。

(15) 春うど

【 ジベレリン協和液剤 】

芽及び根株が十分したたる程度に散布又は瞬間浸漬すること。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行うこと。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさけること。

(16) トマト

トマトの落果防止剤を使用した後散布すると効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、混用して使用すること。

(17) いちご

＜着果数増加・熟期促進＞

- ①処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意すること。
- ②本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決めること。
又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をすること。
- ③過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守すること。

＜果柄の伸長促進＞

処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意すること。

(18) ごぼう

- ①厳寒期は被覆資材等を利用して防寒に留意すること。
- ②第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をすること。

(19) 種いも用ばれいしょ

- ①本剤は種いも生産用として原採種圃に植え付ける種いもに用いるものである。
- ②種いも切断後の処理は薬害を生じるおそれがあるので避け、必ず種いもを切断せずに処理する。
- ③浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
- ④薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくとは発芽遅延等の薬害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
- ⑤種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
- ⑥薬剤処理した種いも及びその収穫物は食料又は飼料には使用しない。
- ⑦品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用すること。
「ホッカイコガネ、男爵薯、トヨシロ、十勝こがね」

(20) 花き

- ①処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理には十分注意する
- ②処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧すること。
- ③チューリップ

＜開花促進＞

- イ. 本剤のチューリップへの利用は促成栽培（促成栽培、半促成栽培）に使用する。
- ロ. 処理時期は草丈が7～20cm（適期：10～15cm）の頃である。
- ハ. ジベレリン溶液は筒状の葉の中心部に1回又は2回（7日おき）滴下する。滴下量が多くなると薬液があふれ通常は溜まる量が過剰分に引きずられて流出し、効果が不安定になるので注意する。1.0mLの滴下であふれる場合は、保持される最大量に止めること。
- ニ. 滴下前に灌水をすませ、筒状の葉の中の水はあらかじめ取り除いておく。滴下後は2～3日灌水をひかえる。
- ホ. 品種により感受性の差異が見られるので感受性の強い品種（ウィリアムピッド、ゴールデンハーベスト等）を選んで使用するのが有利である。

＜花丈伸長促進及び茎の肥大促進＞

- イ. 本適用は促成栽培を対象とし、花丈伸長及び茎の肥大を促し「切花」の品質向上を目的とする。
- ロ. 微量では鋭敏に作用し、過量の場合、花卉の奇形や肥厚の生育異常、葉や花の着色不良若しくは色抜けの生理障害等の薬害が発生しやすいので、使用時期、使用濃度及び使用方法を厳守し、滴下処理に際しては、液が筒内より漏出しないよう注意すること。薬害回避には草丈7～8cmとやや早い時期の低濃度処理をこころがけること。

【 ジベレリン協和液剤 】

ハ. 本適用の効果には品種間差異があるので、促成栽培品種であっても事前に最寄り指導機関の指導を受け、効果及び薬害の有無を確認してから使用濃度を定めること。

④てっぼうゆり

イ. 球根の低温処理は8～13℃ 7週間とするが、本剤によって発芽が早まる場合があるので、発芽状態を見ながら発芽が始まれば、7週間が経過していなくとも出庫する。

ロ. 本剤処理によって休眠が打破され発芽率が向上するが、発根は抑制される。従って定植時期が高温の場合は根の発育が悪くなり、その結果切花重量の減少等の障害を受けやすい。この高温障害防止策として次の処理をすることが望ましい。

○球根は100g以上の大球を用いること。

○定植時よしずや寒冷紗の被覆等によって温度を下げるような管理をすること。

○生育初期に2～3回尿素等の葉面散布剤の散布を行うこと。

ハ. 従来の温湯処理によって根ダニの発生を同時に抑えていたところでは、本剤の処理によっては根ダニの抑制効果はないので、殺ダニ剤等の利用によって発生を防止するよう留意する必要がある。

⑤りんどう

イ. 処理は葉が十分濡れる程度に散布すること。

ロ. 使用時期の定植直前は苗姿3～4対葉期を目安にすること。

ハ. 切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保すること。

⑥ソリダゴ

イ. 高温期の処理では効果を示さないので、低温期(11～3月頃)に処理すること。

ロ. 処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。

⑦さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決めること。

⑧さくら(切り枝促成栽培)

休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理すること。

[3] 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤をはじめて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効薬害の有無を十分確認してから使用すること。なお、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。